

都道府県名	岩手県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	千厩町立千厩小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13	22
児童数	70	68	75	61	77	73	3	427	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着を図る算数科の指導の在り方
- 算数的活動を通して -

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

- 全学年・算数
児童の理解の状況に差が出やすく、学年が進むにつれて、嫌いになる児童の割合が高くなる傾向にある教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

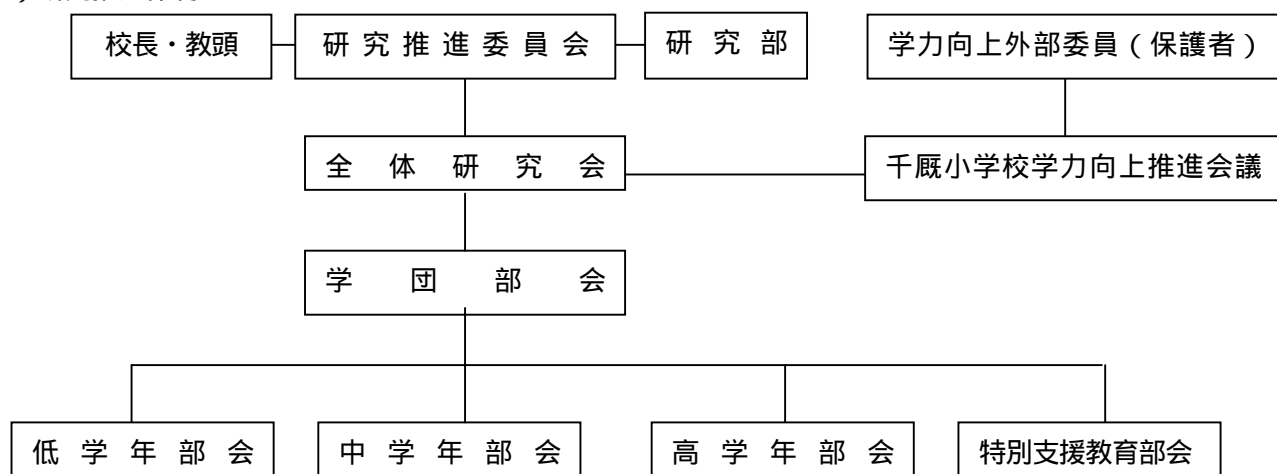
平成 15 年 度	<p>テーマ 基礎・基本の定着を図る算数科の指導の在り方 - 算数的活動を通して -</p> <p>研究の見通し（仮説） 算数科において、単元の指導計画や1単位時間の指導過程に、次のような算数的活動を位置付け、指導と一体化した評価を行えば、基礎・基本の定着を図ることができるであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 意味を分かりやすく理解させるための算数的活動 考え方を育てるための算数的活動 算数のよさや楽しさを感じさせるための算数的活動 <p>研究の内容・方法 研究の内容 本校では以下の3点を算数科における「学力」ととらえ、工夫・改善点を考えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 数量や図形についての知識と技能 見通しをもち筋道を立てて考える能力 楽しさやよさに気付くこと、生活に生かそうとする態度 <p>算数科における児童個々の習熟度に応じた指導方法の工夫・改善</p> <p>ア 算数的活動を位置付けた指導計画 単元や1単位時間の指導過程に次のような算数的活動を位置付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) 意味を分かりやすく理解させるための算数的活動 (イ) 考え方を育てるための算数的活動 (ウ) 算数のよさや楽しさを感じさせるための算数的活動 <p>イ 指導と一体化した評価</p> <ul style="list-style-type: none"> (ア) 「知識・理解」「表現・処理」「数学的な考え方」「関心・意欲・態度」について、具体的な評価規準を設定する。 (イ) 単元の指導計画を立てる際に単位時間の目標に照らし合わせて、4つの観点の中からどの観点を評価するか明確にし、単位時間の評価規準を明確にする。 (ウ) 単位時間の評価は、ねらいが達成されたかどうかを見るために設定した評価規準及び判
--------------------	--

	<p>断基準に基づき行う。</p> <p>(工) 判断基準は児童の具体的な状況例（具体的な児童の姿）で示し、その評価方法とともに指導案に示す。</p> <p>(オ) 評価結果に応じた指導も明確にする。</p> <p>算数科における児童個々の習熟度に応じた指導体制の工夫</p> <p>ア 学習内容に応じた少人数編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レディネステスト等を活用する。 <p>イ 実態に応じたT T 指導及び習熟度別学習</p> <p>その他</p> <p>ア 家庭との連携による工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭学習の仕方の指導と継続的な家庭学習の推進 <p>イ 計算大会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 朝活動での計算練習のまとめとして、年間4回行い、基礎的計算技能の向上を図る。個別指導を繰り返し全員合格を目指す。 <p>ウ 放課後における個別指導の時間の確保</p> <p>研究の方法</p> <p>文献法</p> <p>先行研究や文献などを参考にし、研究の全体構想を立案する。</p> <p>質問紙法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートによる児童の意識調査を実施し、集団及び個々の児童の変容を分析する（7月と2月実施） ・ アンケートによる保護者の意識調査を実施し、実態を把握する（2月実施） <p>授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の視点を明確にし、共通理解の基計画、実施、評価を繰り返しながら児童の変容をとらえていく。 <p>テスト法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ N R T、D R Tテストにより集団及び個々の学習効果を分析する N R T・標準学力テスト（4月実施）、D R T・観点別到達度テスト（12月実施） ・ 単元の事前・事後テストにより、有効度指数を用いて、全体及び上位群、下位群の学習効果を把握し分析する。
--	--

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>基礎・基本の定着を図る算数科の指導の在り方</p> <p>- 算数的活動を通して -</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <p>算数科において、単元の指導計画や1単位時間の指導過程に、次のような算数的活動を位置付け、指導と一体化した評価を行えば、基礎・基本の定着を図ることができるであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 意味を分かりやすく理解させるための算数的活動 ・ 考え方を育てるための算数的活動 ・ 算数のよさや楽しさを感じさせるための算数的活動 <p>研究の内容・方法</p> <p>研究の内容</p> <p>算数科における児童個々の習熟度に応じた指導方法の工夫・改善</p> <p>ア 算数的活動を位置付けた指導計画</p> <p>イ 指導と一体化した評価</p> <p>ウ 算数評価一覧表の活用</p> <p>エ 自己評価の工夫</p> <p>算数科における児童個々の習熟度に応じた指導体制の工夫</p> <p>ア 学習内容に応じた少人数編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レディネステスト等の吟味と活用 <p>イ 実態に応じたT T 指導及び習熟度別学習</p>
--------	---

	<p>その他</p> <p>ア 家庭との連携による工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭学習の仕方の指導と継続的な家庭学習の推進 ・ 習熟度別学習への理解と協力 <p>イ 計算大会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 朝活動での計算練習のまとめとして年間5回実施し、基礎的計算技能の向上を図る。児童の実態に合わせて問題を作成し、個別指導を繰り返し全員合格を目指す。 <p>ウ 放課後の個別指導の時間の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サポートタイムの充実 <p>研究の方法</p> <p>文献法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 先行研究や文献などを参考にし、研究の全体構想を立案する。 <p>質問紙法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートによる児童の意識調査を実施し、集団及び個々の児童の変容を分析する（5月と12月実施） ・ アンケートによる保護者の意識調査を実施し、実態を把握する（12月実施） <p>授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の視点を明確にし、共通理解の基計画、実施、評価を繰り返しながら児童の変容をとらえていく。 <p>テスト法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NRT、DRTテストにより集団及び個々の学習効果を分析する NRT・標準学力テスト（4月実施）、DRT・観点別到達度テスト（12月実施） ・ 単元の事前・事後テストにより、有効度指数を用いて、全体及び上位群、下位群の学習効果を把握し分析する。
--	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

- (1) 具体的な評価規準、判断基準を設定したことで、児童に何を考えさせ、何を理解させたいかが明確になり、算数的活動を効果的に位置付けることができた。
- (2) 評価結果に応じた指導を明確にして授業に臨んだことで、個に応じた支援が適切に行われるようになった。
- (3) レディネステスト等を活用し、習熟度別クラスの編成の仕方を工夫することで、児童の実態に応じた指導を行うことができ、単元で学習する内容の習得状況を高めることができた。
- (4) 計算大会に向けて練習することで、学習内容の定着率が上昇した。また、計算大会において、合格するまで個別指導を繰り返したことは、特に、下位群の児童の定着率を上げるのに効果があったと考える。
- (5) 単位時間ごとの評価規準、判断基準を明確にした指導計画を全学年、全単元分作成した。

2. 今後の課題

- (1) 単位時間毎の評価規準、判断基準を明確にした指導計画を用いた授業実践を積み重ね、実践例を蓄積していく必要がある。
- (2) 少人数学級担当者と担任の打ち合わせを短い時間で的確に行えるように工夫する必要がある。
- (3) 学習内容により効果的な形態（TTか習熟度別学習か）を吟味する必要がある。
- (4) 家庭学習については、家庭の協力の差がある。児童の学習の様子にこれまで以上に興味をもってもらうような手立ての工夫が必要である。
- (5) 計算大会の問題を、今まで以上に児童の実態に合わせるように工夫していく必要がある。

学力等把握のための学校としての取組

- 1 NRT（教研式NRT全国診断的標準学力検査）
 調査の目的 児童の学力の実態を把握する。また、落ち込んでいる部分を分析し、補充指導を行うとともに今年度の教科指導に生かす。
 実施内容 国語・算数（第2学年～第6学年）、社会・理科（第5学年～第6学年）
 実施時期 4月
- 2 DRT（TK式DRT観点別到達度学力検査）
 調査の目的 児童の学力の実態を把握する。また、落ち込んでいる部分を分析し、3学期に補充指導を行うとともに次年度の教科指導に生かす。
 実施内容 国語・算数（全学年）
 実施時期 12月
- 3 知能検査
 調査の目的 児童個々の知能を検査し、知能と学力の相関を把握する。
 実施内容 第1学年、第3学年、第5学年
 実施時期 4月

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 平成15年度
 - (1) 小学校及び中学校教育課程岩手県地区別研修会において実践発表（平成15年8月7日）
 - (2) 平成15年度教育研究「せんまや」への原稿掲載（全20ページ）
- 2 平成16年度
 - (1) 保護者向けリーフレットの作成予定
 - (2) 平成16年度 学校公開研究会開催の予定

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下	7～12学級		
	13～学級	19～24学級		
	25学級以上			
【指導体制】	少人数指導	TTによる指導		
	一部教科担任制	その他		
【研究教科】	国語	社会	算数	理科
	生活	音楽	図画工作	家庭
	体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	